

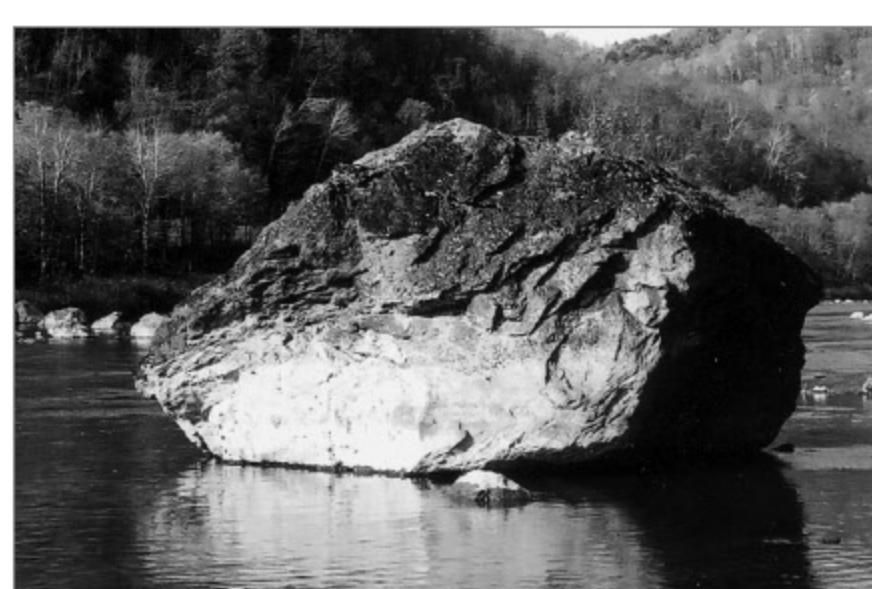
ハルシナイから上流の地名⑥

前回は、ハルシナイから上流の最難所である掲載地図のレーコロプイラ (re-kor-puyra 名前・を持つ・激流)「有名な激流」の意味)を紹介した。安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は「再篙石狩日誌」で、このレーコロプイラから四丁(約四三六)上流に、掲載地図の伝説の大岩のトゥレプサラニプ(turep-saranip オオウバユリの鱗茎・ーを入れたー手さげ籠)があると記録している。

この大岩の四丁下流にレーコロプイラがあったとのことで、次回にかけてその位置を検証したい。

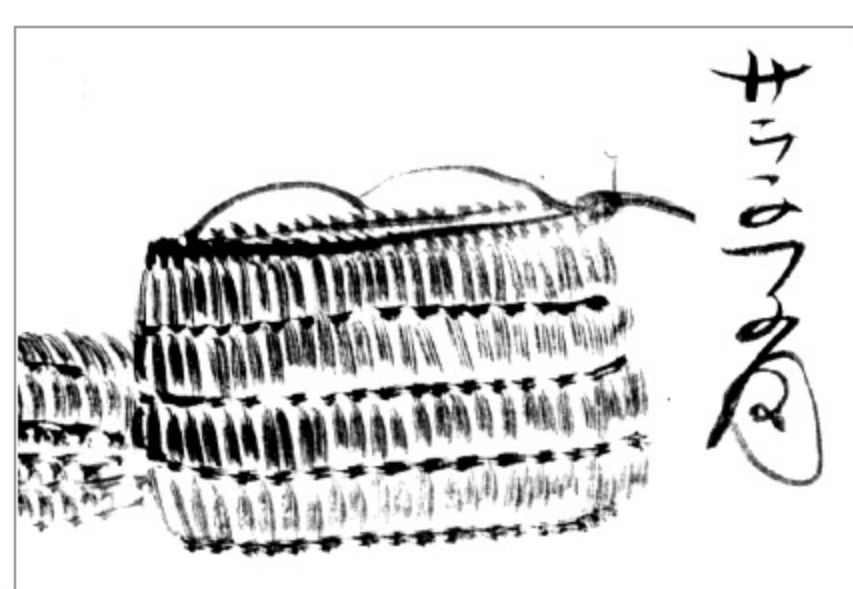
写真①が、トゥレプサラニプの伝説の大岩で、掲載地図のように、石狩川の左岸の岸近くにある。松浦武四郎は、

「トレッツサラ子フー大岩ニツ右(註)上流に向かって右左岸)の川岸に突出す。トレフは則、蕎麦葉貝母、松前方言ウバユリと云。京都辺の山にてはガワユリ、また一名鹿かくれ百合と云もの也。夷言(註アイヌ語)是をトレフと云、山中の婆翁の喰料に大低是を当るもの也。むかし其トレフをサラ子フと云ものに入れて、此処までニ



①トゥレプサラニプ

また川に行くと時、喰料其外の具等を入れて持ち行くもの也。本邦にてコダシ



②「サラ子フの図」

イツイカモイ持ち来り、此処にて命終りて捨てたるが石に化せしと云也。サラ子フは次に図する如し(写真②)。アイヌ

を口外することは禁忌、タブーであったと明らかにしたのは、当時のアイヌの人たちの慣習を知る上で、貴重な記録となっている。

「トレフサラ子フと云は、彼鬼神の携へ居たりし蕎麦葉貝母(トレフ)ー和名鹿かくれ百合といふーを入れし籬(サラ子フ)の化石なりと。惣て此鬼神には種種の縁故も有りしが、アイヌ等他に語ることを禁ぜりとかや。」さて、右のような重要な伝説の大岩であるが、明治二十三年にこの地を調査した永田方正の『北海道蝦夷語地名解』には、全く記述がなく、脱落している。

昭和六年発行の近江正一著『伝説の旭川及其附近』では、松浦武四郎の記録と同様の伝説が、簡潔に記述されているので、最後の部分のみ紹介する。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

96

高橋 基



松浦武四郎が書いた、ダイジェスト版の『石狩日誌』の記述は次の通りであるが、この中で鬼神ニイツイカモイの伝説

「:そしてニチエネカムイの首は岩となり、ニチエネシヤパ(鬼の首)となり、胴体は立岩ニチエネとなり、持つてゐたフゴ(籠)は化石となつてドレツプサルネツプとなつた。ドレツプはうば百合、サルネツプはフゴの意である。」

※毎月第1週号に掲載します